

京都橘大学女性歴史文化研究所 第二八回シンポジウム

「近代ヨーロッパにおける女性の社会進出 ―イギリスとフランスの事例から―」II

アマチュア・ヴォランティアからプロフェッションへ

――前世紀転換期イギリスの女性福祉活動から社会進出を考える――

松浦京子

よろしくお願いいたします。きょうは「女性の社会進出を考える」が共通テーマですが、簡単に「女性の社会進出」と言っても、先ほどの松田先生のお話にもありましたように、いろいろな困難を乗り越えなければなりません。それを踏まえて、視点を少し変えてみたお話しをしたいと考えています。もう少し具体的に言えば、前世紀転換期（一九世紀末から二〇世紀初め）に、イギリスでニューウーマンと呼ばれる女性たちが登場しました。この女性たちが、私の考える「女性の社会進出」のイメージにあたると言えます。そのニューウーマンが就いた職業はいろいろあって、じつは先ほど松田先生が挙げてくださった職業のほとんどが重なりますが、ほかにもあるわけで、その一つであるヘルス・ヴィジター（保健師）、いわゆる医療／福祉職を探り上げ少しケーススタディ的に考えてみようと言うわけです。

医療／福祉職は、おそらくヨーロッパ諸国はほとんどそうだと思います。

ですが、イギリスの場合、間違いなく女性によるヴォランティア、チャリティ活動にその起源があります。いわゆるアマチュア、ヴォランティア活動だったものが公職になり、専門職として確立していったわけで、ヘルス・ヴィジター（保健師）も、まさにそれに当てはまるものです。

ところが、少しややこしいことに、サニタリー・インスペクター（衛生監督官。非常に強い権限を持った公務職）と微妙に、というか奇妙に絡み合うこととなります。つまり、当時のニューウーマンのある人たちが、公衆衛生公務職として、本来異なる二つの職に関心を寄せました。それはなぜなのか、それがどんな結果に終わったのかに目を向けることが「女性の社会進出」のケーススタディになると考えた次第です。

それでは女性の社会進出とは何であるかを改めて考えてみましょう。

家に閉じこもって働いていなかった女性が、外に出ていったことでしょうか？ 違いますね。松田先生がおっしゃったように、もともと女性は働いていました。ですから、あえて社会進出、それもいままら百年前の女性にとつての社会進出と言うと、次のように考えられるのではないのでしょうか。

ひとつは公的社会(政治、経済、社会面)での活躍が社会進出であったということ。政治は、まずは参政権を獲得しなければならなかったし、経済も、いわゆる基幹産業、もしくは企業の中核で働くような女性が生まれるとか、いずれにせよ活躍できるようになることが進出なのではないかと。いやいや、それでは中途半端な定義に過ぎないというなら、私は次のように考えました。たしかに女性は、働いてきて、社会のなかで応分の役割を果たしてきたけれども、それでも女性の存在が認められない分野(その職に就いてはならない。してはならない)がけっこうあった。そういう領域に女性が進出していくことが、本当の意味での社会進出だったのではないかと。

たとえば事務員、商店やデパートなどの販売員は、いまでは大学を卒業した女性たちが就く職業ですが、かつては女性の存在が認められていなかった領域です。そこに女性の事務員、女性の販売員が登場しました。もうひとつの職業は公務員です。そこに女性が進出していったことは、社会進出と言えるだろうと思います。そこで今回は、公衆保健衛生分野の公務員であるサニタリー・インスペクターとヘルス・ヴィジターを取り上げてみたいと思います。なぜなら、中流階級(松田先生のお話では「ブルジョワ階級」)の女性に限定してみると、中流階

級の女性がめざした職は女性の専門職(プロフェッション)だったわけ、その一例にサニタリー・インスペクターとヘルス・ヴィジターがあったのです。

さて、中流階級という言葉を出したので、イギリスの社会(階級)構造について少しお話をしておきたいと思えます。イギリスは、階級社会であると言われていまして、いまでもそうではないでしょうか。すでに三〇年以上も前の私の経験になりますが、二〇世紀の終わり頃のイギリスでも、二年も暮らせば、強く階級を意識せざるを得ませんでした。ましてや百年余り前の前世紀転換期のイギリスは、完全な階級制を持つ社会であったと言えます。

イギリスの階級構造を大きく分けると、上流階級、中流階級、労働者階級となります。ニューウーマンが登場するのは、中流階級と上層労働者階級あたりからだと思います。まずこの階級構造を頭に入れていただいて、中流階級は一九世紀においては、社会の真ん中辺を占めていて、「世界の工場」と呼ばれたイギリスの経済的繁栄を自分たちが支えたのだという意識を持つ、イギリスの中核的な階級であった、という認識をお願いします。当然、経済的には余裕のある層になります。これもご記憶ください。

イギリスは一八〇一年に、センサス(国勢調査)を世界で最初に始めています。産業革命を経験し、労働力不足に陥ったイギリスが、「いたいイギリスの人口はどれぐらいなのか」という疑問を抱き、国民の悉皆調査をして、人口動態を正確に把握したい、というところから国勢調査が始まりました。ですから、人口分布や職業分布が、統計資料

表1 婦人の多い職業(1841年)

職 業	男		女	
	20歳以上	20歳未満	20歳以上	20歳未満
Charwoman	—	—	19,029	316
Cotton manufacture	91,842	44,833	82,083	62,131
Dressmaker and milliner	436	127	84,064	22,174
Factory worker (not specified)	5,631	3,665	7,556	5,626
Laundry keeper, washer and mangler	532	51	49,001	1,705
Lodging and boarding house keeper	1,313	5	8,882	50
Nurse	60	7	12,654	534
School master, mistress and assistant	21,482	902	30,688	1,715
Seamstress and Seamster	110	29	23,720	4,452
Domestic Servant	144,072	90,464	562,392	349,079
Spinner (branch not specified)	2,627	657	7,127	2,569
Straw-bonnet and hatmaker	351	30	7,709	2,476

1841 Census, *British Parliamentary Papers* (以下 P.P. と約す), *Population* vol.5, pp.43-56 より抽出。
引用元：吉田恵子「産業革命期婦人労働の2類型」『明治大学短期大学紀要』23号、1978年、68頁。

として細かなかたちで残っています。この資料を用いての女性労働研究はすでに一九世紀末には着手されており、以降もいくつかの論文が発表されています。今回は、これらをご紹介します。まず一九世紀半ばの状態です。

表1は一八四一年のセンサス報告書から女性が多く就いている職業

表2 婦人の多い職業(1891年センサス)

職 業	人 数	婦人10,000人当り		
		1881	1891	増減
Domestic servant	1,386,167	1,231	1,209	-22
Milliner, dressmaker	415,961	358	363	+ 5
Cotton manufacture	332,784	303	290	-13
Washing and bathing service	185,246	177	162	-15
School-master, teacher	144,393	123	126	+ 3
Charwoman	104,808	92	92	—

1891 Census, *General Report*, p.58; C. Collet. *op. cit.*, p.10.
引用元：吉田恵子「19世紀末イギリスにおける新中間層の出現と婦人労働」『明治大学短期大学紀要』24号、1978年、22頁。

を抽出したものです。ドメスティック・サーヴァント(女中さん)は圧倒的に女性の職業です。それ以外には、綿織物工場の女工さん、裁縫関係(衣類の縫製など)があります。おもしろいのは洗濯業です。洗濯業も、産業革命が起こり都市化が進んだイギリスにおいては、特徴的な女性職と言えます。そして、すでに一九世紀半ばにして「自分の職業といえば教師である」と、国勢調査で答えた女性たちが多いことがわかります。でも、この教師職も「おばさん学校」と呼ばれる託児所兼初歩的職業訓練所の先生が多くを占めていました。これらの職業は、中流階級(経済的に余裕のある層)が就いている職業とは言えません。表

2の五〇年後の一八九一年のセンサス結果でも大きな変化はありません。やっぱり衣類縫製、綿織物工場、洗濯業、学校の先生が多いです。少し違うのは、女中さんは減っているのに対して、学校の教師は増えているという点です。こうした変化を確認したうえで、ここから何を見たいか。イギリスは階級社会であると、最初に紹介しました。この階級社会において、結局、女性は大きく二つに分かれます。

ワーキング・ウーマンは、働く女性、です。社会の下半分を占め、人口でいえば八割近くを占める労働者階級に属する女性です。その対比語としてあるのがアイドル・ウーマンです。

この「アイドル」は、偶像のアイドルではなく、「暇を持て余した女性」という意味でのアイドル・ウーマンです。自らを卑下して、もしくは人びとからかわれて呼ばれた言葉です。中流階級の女性を表す言葉が「アイドル・ウーマン」というわけで、つまり、働かないことに意味を見いだした女性なのです。彼女たちは、まず経済労働をしません。家庭の主婦です。「家庭の天使」と言われました。しかも、家庭の主婦であったとしても、家事や育児にはサーヴァントを雇い、直接タッチすることは少ない。では、何のために存在するのかというと、結婚して子どもを産み、結婚相手の男性の経済力を世間に見せつけることに意義がありました。たとえばサーヴァントの雇用も、中流階級にとっては自分たちの経済力を誇示するためのものです。

また、アイドル・ウーマンは、働きはしないけれども、いわゆる福音主義の思想に基づき、「社会に貢献しましょう」ということで、ジェントルマンのバターナリズムを継承し、チャリテイ、ヴォランティア活動に勤しみました。それに対して、ワーキング・ウーマンは、労働者階級として、彼女たちの労働がアイドル・ウーマンのアイドルたることを支えていたと言えるでしょう。

このことを確認したうえで、一八九一年時点での女性の多い職業は、構造的には五〇年前と何の変化もないのだとすれば、先ほど申しました。「やっぱり中流階級の女性は働いていないんだ」と言うことにな

表3 婦人の増加率の高い職業
(婦人10,000人当り)

職 業	1881	1891
Commercial clerk	6.0	15.6
Paper-box, bag maker	8.7	15.0
Tabacco manufacture	8.6	13.9
Civil service	3.2	7.5
Printing trade	2.2	3.9
Telegraph and telephone service	2.2	3.8

C. Collet, *op. cit.*, p.9.
引用元：吉田恵子「19世紀末イギリスにおける新中間層の出現と婦人労働」『明治大学短期大学紀要』24号、1978年、23頁。

るわけですが、じつは変化はありませんでした。就業女性の割合が増えている職業に注目すると、表3から分るように事務職員の就労率は、一八八一年と、一八九一年の間に大きく上昇し、公務職や電信電話局などの女性の就業率も上昇しています。

そして、中流階級の女性就労について研究したホルコムは、表4のようにたしかにその辺りで増加率が上昇していたことを指摘しています。表5の婦人事務職員数の推移を見ても、一九世紀から二〇世紀に変わる時期に女性の就業形態に変化が生じていることがわかります。それが「ニューウーマンの登場」と私が考えるところです。

イギリスの公立小学校の教員の記念写真(図1)を見ると、こんな感じで女性が半数を占めています。その次は家庭科を教える女性教師(図2)です。ロンドンの中央郵便局の一室を撮った写真(図3)では、見事に女性ばかりで、隅に少し男性がいる程度です。その次は女性ばかりの電話の交換手の様子(図4)です。その次は、デパートの通信販売部門で注文書を整理している女性(図5)です。当時のロンドンにはデパートがいくつもできていましたが、通信販売に力を入れていまし

表4 中流階級の職業従事者の増加率

年	増加率	婦人就業者一般の増加率	全婦人就業者に占める割合
1861			5.0
1871	28.9	1.5	7.4
1881	26.1	0.1	9.3
1891	41.0	18.0	11.1
1901	26.1	3.9	13.5
1911	40.8	15.8	16.4

L. Holcombe, *Victorian Ladies at Work*, Newton Abbott, 1973, pp.214-5 より

引用元：吉田恵子「19世紀末イギリスにおける新中間層の出現と婦人労働」『明治大学短期大学紀要』24号、1978年、23頁。

表5 婦人事務職員数の推移

年	実数	全事務職員における婦人の割合	増加率
1861	279	0.3	
1871	1,446	1.1	418.3
1881	6,420	2.7	344.0
1891	18,947	5.1	195.2
1901	57,736	11.1	204.7
1911	124,843	18.1	116.2

L. Holcombe, *Victorian Ladies at Work*, Newton Abbott, 1973, p.210 より

引用元：吉田恵子「19世紀末イギリスにおける新中間層の出現と婦人労働」『明治大学短期大学紀要』24号、1978年、23頁。

た。この写真では男女が一緒に働いていますが、じつはそれまで販売職は男の世界でした。日本でも、時代劇を見ると、越後屋など大店の店頭で働いているのは小僧・丁稚・手代・番頭など、すべて男性です。女性たちは、その裏で家事仕事に勤しむ女中しかいませんでした。女性が販売の現場に出てくるのは、日本でもイギリスでも同時期だったのではないのでしょうか。

これらをまとめて、前世紀転換期にニューウーマンが登場したと、私は考えます。そのうえで、そのニューウーマンについて、二つに分をしたいと思います。

そのひとつは新中間層の女性です。「ホワイト・カラー」という言葉は、皆様ご存知だと思いますが、女性の「ホワイト・カラー」職という意味であえて「ホワイト・ブラウス」職と呼びます。つまり、事務職、販売職、電話交換手、タイピスト、速記者といった職が成長し

てきたことで、それまでとは違う就業形態を持つ女性「ニューウーマン」が登場したわけです。

もうひとつは中流階級女性の就労増加です。先ほど申しましたように、働かないことに意味のあった女性たち、働いてはいけない、働くことによって品位と階級を失うとされた女性たちが、どんどん職に就くようになりました。彼女たちもニューウーマンのひとつの姿です。

彼女たちは、ある意味、ヴィクトリア朝的中流女性像への明らかな反抗として働き始めたとも言えます。そして、もう一方では、「結婚がすべて」と言われながら結婚難という現実への対応でもありました。

なかなか結婚できませんでした。なぜなら、当時は成人女性の数が男性よりかなり上回っており、したがって、自立・自活しなければならぬ女性たちが就業していたというわけです。

しかし、反抗し、あるいは自立・自活のために働かなければならぬくなつたとはいえ、そこはやはり中流階級です。どんな職に就いてもよいわけではないのです。階級にふさわしい職であることが重要でした。そしてそれに加えて、「アイドル・ウーマン」と揶揄されて、「世の役に立たない」とされてきた女性たちが、「いや、違う。自分たちだって社会に存在しているんだ。役に立つんだ。有意な存在なのだ」ということを証明したいという思いも、とても強くあったのだと思います。ですから、社会的に有用・有意であることも大きな目標としました。そういう職、すなわち、女性の専門職（プロフェッション）を創り出したい、確立したいと考える。それが

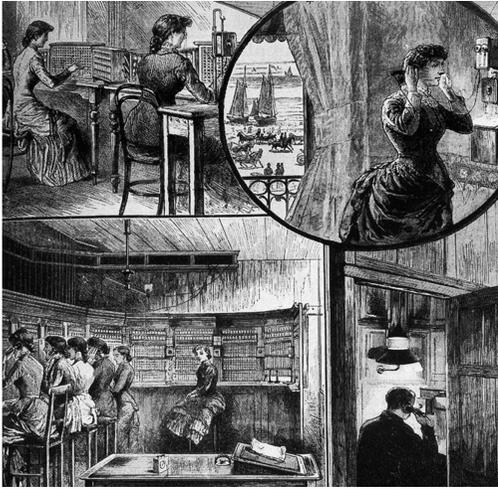


図4 Joan, Perkin, *Victorian Woman*, London, 1993, Illustrations.



図1 A.M. Newth, *Britain and the World 1789-1901*, Penguin Books, 1967, p. 177.



図2 Joan, Perkin, *Victorian Woman*, London, 1993, Illustrations.



図5 George R. Sims, *Living London*, 3 vols., Cassel & Co.Ltd., 1902 (Rep. 1990, vol.3, p.44).



図3 George R. Sims, *Living London*, 3 vols., Cassel & Co.Ltd., 1902 (Rep. 1990, vol.2, p.189).

六八年に労働者階級に参政権が与えられます。参政権を与えるにあたって、労働者にちゃんと教育を与えなければならない、物事の判断能力を労働者にも育まなければならない、ということが、おそらく公教育制度の背景にあったらうと言えます。労働者も政治に参加できる、いわゆる大衆民主主義になって、労働者階級も含めて広く国民には教育が必要である。それが公教育であり、国家の責任における教育です。そして、識字能力を身につけた労働者階級の女性の職業選択の幅が広

前世紀転換期のニューウーマンのひとつの姿であつたらうと考えています。

さて、このようなニューウーマンの登場の背景には何があるのでしょうか。いろいろあります。イギリス社会が大きく変化したからです。政治・経済構造が変化します。公教育制度ができて、公立の学校が次々とできました。その変化の背景に何かあるかという、イギリスの場合、一八

がったのです。

イギリスの経済構造も大きく変わります。イギリスは、「世界の工場」であり、世界で最初に産業革命を興して、経済力でトップを走りましたが、気がついてみればドイツとアメリカに追い抜かれていた。それが一九世紀末のイギリスの姿です。ただし、それで簡単にしばむイギリスではありません。イギリスについては今回のブレグジットの関係で、「まだ沈んでない」「いや、沈んだ」など、いろいろな見方が出ていますが(笑)、いずれにせよ一九世紀末に「世界の工場」からは転落しました。それでも、まだまだイギリスはしぶとく生き残り、「世界の銀行」へと変わります。シティには、世界中の銀行の支店が集まり、金融の中心です。そして、当時は帝国主義の時代で、世界中に海外投資が行われたのですが、その海外投資の資金が集まるのがロンドンのシティでした。だから、金融部門が大きく膨れ上がり、そこでタイプライティングも含む事務職への需要が高まり、そこに女性たちが進出したと言えると思います。

帝国主義は、先ほどの松田先生のお話とも関わりますが、国家間の競争であり、時には熱い戦争にもなります。そうすると、人口の多い国の方が兵士の数も多い。また兵士として活躍できる、体格のよい頑健な男子が多ければ兵士の数に困らないというわけで、イギリスは「産めよ、増やせよ」という政策を採りますが、何よりもまず兵士になるのに堪えうるような体力を持つ子どもをつくらなければならぬということ、そのために貧しい労働者に対するさまざまな福祉制度の整備が進むこととなります。その子どもたちを無事に育て上げるた

めに活動する公務職が、ヘルス・ヴェジターであり、サニタリー・インスペクターであり、そこに中流階級の女性たちが自分たちの専門職を夢見たわけです。

中流階級の女性たちの就労増加の理由についてはすでに触れましたが、そこには経済的に自立しなければいけないという理由以外にも、私はやはり、一九世紀中葉以降、イギリスで展開したフェミニズムの影響があるだろうと思います。フェミニズムは、「女性の権利拡張」「女性の地位向上」など、いろいろな言い方をします。一九世紀のフェミニズムは男女平等を求める運動とは言えませんが、中流階級の女性たちがある種の運動を起こして、結果的には女性の専門職の確立を希求したことが特徴の一つと考えられます。

つまり、一九世紀フェミニズムは、中流階級の女性による、中流階級の女性のための運動といえます。そして、それは当然、経済的自立を獲得するためであり、もつといえれば領域の分離＝社会的疎外からの解放でした。私はここでは、女性が存在することが認められなかった領域に出ていくことを社会進出と考えるという話をしましたが、まさにそれがフェミニズムなのです。当時のイギリスの中流階級以上の社会規範として「領域の分離」というものがありました。これは、日本でいえば性別役割分担に近いものかもしれませんが、「男たちは公領域、女性たちは私領域にいるべきだ」とされ、その結果、女性が就いてはならない職、存在してはならない領域がたくさんありました。

たとえば大学教育は、男の教育です。医者や法律関係、さらにいえば官職はすべて男たちのものであり、女性はそこに就くことができま

せんでした。これが領域の分離です。「私的な世界でのみ存在せよ」と言われると、それは「社会的疎外」にほかなりません。その疎外から解放されたいというのが一九世紀フェミニズムの本質である、と私は考えています。

フェミニズムという言葉がもう一度よく言われるようになるのは、二〇世紀後半になってからで、一九六〇年代末から七〇年代に「ウーマンリブ」と呼ばれたものがあります。「第二波フェミニズム」「現代フェミニズム」と呼ばれているものです。その特徴はさすがに「疎外からの解放」ではなく、「女性の存在は従属もしくは抑圧の状態にある。そこからの解放を求める」というものでした。真の意味での男女平等を求めるのが二〇世紀のフェミニズムですが、一九世紀はまだそこまでは行っていないで、「少なくとも女性が行けない領域はなくしたい」という運動だったと言えるでしょう。

具体的な獲得領域としては、ひとつは法的権利です。それまで女性たちは、親権もなければ、離婚の権利もなく、財産権さえ既婚女性にはありませんでした。女性が持参金を持つていったとしても、働いたとしても、そのお金はすべて夫のものでした。それから、書類にサインする契約権もありません。訴訟権がなく、訴訟を起こすことのできないので、民事裁判の当事者にもなれませんでした。このように、さまざまに疎外されていた権利を獲得する運動であり、中等教育もまともなものはないから獲得したいと女子教育改革に取り組みます。そして、その先にあるのが専門職です。ちゃんとした中・高等教育を受けて、大学教育を受けて、学位を取って、専門職に就き、最終的には参

政権の獲得というかたちになります。

一九世紀フェミニズムを簡単に図式化すると以上のようなかなと思えますが、いくつもの女性雑誌やパンフレットが出て、こうしたことを宣伝します。これらの雑誌でけっこう推奨されていたのが、じつは社会活動であり、「ヴォランティア・ソサエティーに参加して、チャリティを頑張りましょう」ということでした。入ってはいけない領域があつて、そこへ入ろうというフェミニズムですが、そこまで過激になれないけれど、家に閉じこもつて、くすぶっているのはイヤな女性たち、社会にちゃんと貢献したい女性たち、彼女たちにふさわしいのがチャリティ、ボランティア（一人するのが大変だったらヴォランティアの組織）だということ、そこに参加し、自らのできるところをしましょう」という宣伝が非常にありました。

これらの流れの中から出てくるのがヘルス・ヴィジター、もしくはそれと大きく重なるかたちで存在したサニタリー・インスペクターという職になると思います。一八五八年に創刊されたフェミニズム雑誌『イングリッシュ・ウーマンズ・ジャーナル』の翌年の号に、「衛生改革において女性がなすべき仕事の詳細について」という記事が掲載されています。この記事では、フェミニズム雑誌が注目した、女性のなすべきこと、社会に貢献できることとして、「女性は衛生改革に貢献すべきだ」と言っています。

そして、その後継誌『イングリッシュウーマンズ・レビュー』は、一八六六年から一九一〇年まで刊行されましたが、この時期になるとどんな職業に中流階級の女性が就くことができたかをいちいち紹介し

表6

I 教育専門職		
1 大学教員	2 中等(女)学校教員	3 小学校教員
4 障害児教育教師	5 体育教育教師	6 家庭科教育教師
II 医療専門職(含む歯科医)		
1 内科医、外科医	2 歯科医	
III 看護師、助産師(含むマッサージ専門職)		
1 一般病院看護師	2 プライベート・ナース	3 救貧施設療院看護師
4 隔離病院看護師	5 地区巡回訪問看護師	
6 学校看護師、査察看護師	7 植民地における看護師	
8 陸海軍病院看護師	9 刑務所看護師	
10 助産師(医師以外の女性専門職としての)	11 マッサージ専門職	
IV 地方公務職 衛生監督官、ヘルス・ヴィジター(保健師)		
V 公務職		
1 上級公務員	2 一般公務員	
VI 事務職、秘書		
VII 女優		

Edith J. Morley (ed), *Women Workers in Seven Professions: A Survey of Their Economic Conditions and Prospects*, London, 1914 より作成。

ていきます。「この職に就いた人、いますよ。みんな、頑張りましよう」という感じでしょうか。たとえばこんな記事が一八九四年一月号に載りました。「ケンジントン区のセント・メリー教区で、二人のレイディーがサニタリー・インスペクターに任命された。これは工場法ならびに公衆衛生法に基づく任命である。報酬は年六〇ポンドである。二人とも、ナショナル・ヘルス・ソサエティーで訓練を受け、レイプロマを持っている」という内容です。「こんな公務職もあるんだよ。

表7 最新センサス報告に基づく専門職7領域における女性従事者(1911年 イングランド&ウェールズ)

	合計	未婚	既婚	寡婦
I 教育専門職	187,283	174,480	11,798	4,005
II 医療専門職	477	382	76	19
III 看護師助産師	83,662	55,288	11,867	16,507
IV 地方公務員&救貧委	19,437	14,439	2,514	2,484
V 国家公務員	31,538	25,843	3,410	2,285
VI 事務職	117,057	114,429	1,733	895
VII 女優	9,171	5,259	3,540	372

Edith J. Morley (ed) *Women Workers in Seven Professions: A Survey of Their Economic Conditions and Prospects*, London, 1914. Appendix II より引用。

これからも続きましよう」という感じですが、フェミニズムの人たちが注目する公務職として紹介され、実際、公衆衛生保健職は、女性たちにとって関心のある領域だったのだらうと思います。

『七専門職の女性』(ウイメン・ワーカーズ・イン・セブン・プロフェッションズ)(一九一四年)は、教育職、医療職、看護師・助産師、地方公務員、国家公務員、事務職、女優という七つの専門職を紹介しています(表6参照)。ちなみに、女優が専門職のリストに上がっていますが、舞台俳優は現在も大学を出て就くのが当然とされる専門職です。

教育関係は、大学教員から始まって、いろいろな教職があります。専門職の代表格である医療関係も、内科医、外科医、歯科医があります。看護師・助産師は、当時、女性の専門職として確立しつづけた職業ではあるのですが、多様な職種が紹介されています。そして、国家公務員ではなく地方公務員として「こんな職がありますよ」とわざわざ紹介されているのがサニタ



A COUNTY COUNCIL INSPECTOR'S VISIT.

図7 George R., Sims, *Living London*, 3 vols., Cassel & Co.Ltd., 1902 (Rep. 1990, vol.2, p.256).



AT THE MUSEUM, SHIPPED BY THE FACTORY INSPECTOR.

図6 George R., Sims, *Living London*, 3 vols., Cassel & Co.Ltd., 1902 (Rep. 1990, vol.1, p.52).

リー・インスペクター(衛生監督官)とヘルス・ヴィジター(保健師)です。それから公務員(上級公務員、一般公務員)、事務職と続いて、最後に女優が挙げられています。以上七つの専門職にどれぐらいの女性が従事していたかを、表7の一九一一年のセンサス報告で見ると、三番目に多いのが看護師・助産師です。国家公務員の数もけっこう多いと言えます。でも、それなりに多いものが地方公務員・救貧委員会(選挙で選ばれる公務職)で、これには一九、四三七人が従事しています。ここにサニタリー・インスペクターとヘルス・ヴィジターが含まれています。では、インスペクターとは何でしょうか。インスペクターはいくつもあった、当時の出版物の挿し絵(図6、7)を見ると、縫製の仕事場に向いて、衛生環境をチェックする女性のサニタリー・インスペクターや、ロンドン・カウンティ・カウンスルの男性インスペクターが出てきます。後者は簡易宿泊所にインスペクターがやって来た図で、私生活の場にはずかずか入り込んだイヤな男です(笑)。おまけに傘を後ろ手に持っています。これはおそらく、圧力をかけているのだと思います。

つまり、インスペクターは、公権力というのでしょうか、法律によって一定の権限を認められて、ずかずかと個人の空間に入り込む権限を持つている公務職ということになります。一九世紀末以降、その職に女性も登用されつつありました。その登用部門として、サニタリー・インスペクターと、それと交替してしまうようなかたちで登場したのもとして保健師という職が存在します。ここに注目して、あまり時間はありませんが、お話ししたいと思います。

イギリスは、世界で最初に産業革命を経験し、急激な都市化を経験し、めっちゃくちゃひどい衛生環境を経験します。それは伝染病の大流行であり、また、大量の乳幼児死をもたらしました。その結果、一九世紀のイギリスでは公衆衛生もしくは公衆保健衛生と言われる行政施策が展開しました。そのなかから地方公務職としてのサニタリー・インスペクターが現れます。

一方で、この問題である大変な状況に対して、「女性は社会に貢献しろ。チャリテイに頑張れ」というわけで、女性のチャリテイ・ヴォランティア活動が大活躍します。この伝統のなかから現れてきたのがヘルス・ヴィジター(保健師)ということになります。

イギリスで本格的な公衆衛生が展開し始めるのは一八四〇年代、エドウィン・チャドウィックという人物の貢献によるものです。議会に調査委員会をつくって、大都市ロンドンの衛生調査を徹底的に行いました。そして、「こんな状況があるんだ。どうだ」と問いかけたわけです。「衛生改革が必要だ」と呼びかけ、そのための法整備を求めましたが、それはすぐには成就しませんでした。でも、法整備はすぐに進みませんでした。一八四〇年代から各地で地域のヴォランタリー組織が衛生改善のための活動を始めるようになります。その流れのなかで、公的には四〇年代末以降、次々といろいろな法律ができていきます。

ここで注目していただきたいのは、地方公共団体に公衆衛生担当官として医者が採用されるようになったということです。この保健医官(MOH)のもとで査察業務・調査業務を担い、そして公衆衛生法を執

行する権限を持つ者として、最初はインスペクター・ニューサンス(迷惑物除去についての査察官)でしたが、後にサニタリー・インスペクターと呼ばれるものが登場します。この時点では男性職です。まずはロンドンで、そして全国的に七〇年代に、これらの職が公衆衛生のための職として確立していきます。

一方で、「法整備が進まないならヴォランティア活動で衛生改善に貢献しよう」という動きがあったわけですが、一八五二年には、マンチェスターで労働者階級宅への悉皆訪問調査と衛生知識の普及活動が取り組まれています。マンチェスターは、大都市で商業都市ですが、巨大な貧困地区があり、その地区からは毎年のように非常に深刻な伝染病が発生し、大量死が発生していました。チャドウィックは「それを防ぐには衛生改革が必要だ」と指摘していましたが、そういう地域の状況調査が必要だということで、ヴォランティアですが、すべて自分たちのお金で悉皆調査をしました。そして、「衛生状態が悪いのは知識がないからだ。まずは知識を普及しよう」という活動が最初は男性のジェントルマンたちの運動として始まります。

そして、一八五七年にはロンドンで女性たちが労働者階級家庭への衛生知識の普及をめざして婦人衛生協会(L.S.A.: Ladies' Sanitary Association)をつくります。この協会の支部としてマンチェスターに、後に婦人保健協会・レディス・ヘルス・ソサエティ(L.H.S.)と呼ばれるヴォランタリー組織ができます。

簡単にですが、婦人衛生協会(L.S.A.)についてご紹介します。この協会は、ロンドンに拠点を置きますが、衛生知識、家政、育児に関わ

る小冊子の発行を大きな活動としました。結成から二五年後の一八八二年までの小冊子の発行部数は一、五〇〇万部です。この冊子は、労働者の家を訪問して配布することを目的につくりました。値段は一部一ペニーぐらいですが、基本的には無料で配ります。この組織は自ら配ったりはしなかったのですが、すでに当時、イギリスには、労働者の家を訪ねていつて必要なものを提供したり、禁酒を勧めるお説教をしたり、病人を看護したりするヴィジティング活動が、ヴォランタリーのチャリティとして非常に大きく展開されていきました。それらの組織が訪問するなら小冊子を持って行くことになりました。

そして、協会は、「最も衛生知識を必要としている労働者階級こそが、従来からある方法で誰よりも教えがたい人たちである。彼らにそれを教えないと衛生改革は進まない。だから、知識を集めた小冊子をつくった。でも、小冊子を持っていつて置くだけではだめだ。貧困層、とりわけ女性たちには衛生に関する小冊子を配るだけでは不十分で、口頭で実際に教えなければならぬ。だから、訪問した人が個人的影響力を行使しなければならぬ」という考え方を掲げました。これが、ヘルス・ヴィジター(保健師)活動の原点でした。婦人衛生協会はそれをしたわけではありませんが、それを考え、小冊子をつくったわけです。小冊子の一覧表を見ると、いろいろな項目がありますが、あまり英語がやさしくないので、こんな冊子を置いていかれても労働者は絶対に読めないだろうと思います。だから、この冊子を持っていつて、書いてあることを口頭で説明してあげようというわけです。たとえば子どもの洗髪の仕方が書いてあるのですが、それを実践してみせる。

そういう訪問者を必要としている、というのが協会の主張であり、それを実践したのが協会のマンチェスター支部(先述のLHS)です。実際に労働者の家に訪ねていつて、子どもの髪の毛を洗うというのは、私的な空間にずかずか入っていくことになりますので、「労働者宅を訪問するのであれば、同じ労働者の、それも同じ地域に住んでいる人の中から活動してもらえばいいんだ」ということで、専任訪問員(ミッシェン・ウーマンと呼ばれる)の女性を雇用し、ちゃんと初歩的な訓練をして、訪ねてもらうことにしました。

ただし、その際には、中流階級の女性たちが監督し、労働者階級の女性に訪問員として活動してもらおうというかたちでした。「マンチェスターのセント・カザリン区では、レディ監督としてミス・ハワースがいて、そのもとに男性ヴィジターもいるが、実際に訪問するミッシェン・ウーマンとしてはミス・レスターがいる」という報告書が出ています。

このように、ヴォランタリーとしての活動が進むなかで、先に触れたとおり、保健医官(MOH)の下で働く公衆衛生公務員としてサニタリー・インスペクターが登場しました。環境上の衛生欠陥の有無について査察し、告発もするという強い権限を持つ職で最初それは男の世界でしたが、そこに女性が入り込む可能性が出てきたのです。

一八七〇年、スコットランドのグラスゴーという造船の街が、アシスタント・インスペクターとして女性を四人雇用しました。サニタリー・インスペクターのアシスタントではありますが、女性が雇用されたということは大きなニュースになります。それを受けてすぐに、

「大学的高等教育を女性に」という運動を進めているヨークシャー婦人教育カウンシルが、「衛生は女性の分野ではないか」ということで、衛生学の教育に着手します。学位・資格に基づく女性衛生専門職への挑戦がここに始まりました。

そして一八七一年には、先に触れたケンジントン区のサニタリー・インスペクターが訓練を受けたところとして名が出てきたナシヨナル・ヘルス・ソサエティーが設立されます。設立者のエリザベス・ブラックウエルは、イギリス人女性初の医師ですが、医師資格を取ったのはイギリスではなくアメリカです。渡米し、アメリカで医者になって、イギリスに戻ってきて、「私に続け」と全国行脚をしました。そこから本当の意味でのイギリス初の女医が生まれるわけですが、このブラックウエルは医者だけでなく公衆衛生関連の女性の専門職を育てたいと思って、中流階級女性のための教育機関を立ち上げたというわけなのです。

さて、その二〇年後の一八九〇年に大きく時代が動きます。マンチェスター市とLHS(労働者の女性から優秀者を選んで専従訪問員として雇用し、衛生知識の普及に携わっていた協会)が提携して、「協会のミッション・ウーマンの給与は負担するから、マンチェスター市の保健医官の指示のもとに働くように」ということになりました。ヘルス・ヴィジター(保健師)の公職化への第一歩です。

その一年後の一八九一年には、女性サニタリー・インスペクターの任用が法律によって可能になります。法律が変わったのです。フロレンス・ナイチンゲールは「近代看護の母」と呼ばれますが、その従

甥に当たる人でバッキンガムシャーの州知事が、ナイチンゲールの支援を受けて一八九二年に、ノースバッキンガムシャー・テクニカルカレッジで女性向けの衛生教育を行い、サニタリー・インスペクターやヘルス・ヴィジターを養成する課程をつくりました。つまり、学校教育、それも高等教育を通して、公衆衛生の専門家である女性をつくらうという動きが起こりつつあったのです。

そして、現実に法律の改正を受けて、たとえばノッティンガムでは初の法定女性インスペクターが採用され、ロンドンでは先ほど紹介したようにケンジントン区で採用されます。一九〇二年になると、サニタリー・インスペクターはロンドンを除く全国で四五人、ロンドンでは十数人がいて、女性の公衆衛生分野の公務職がちゃんと生まれたのだと思えてきます。

サニタリー・インスペクターが生まれつつあるというので、女性サニタリー・インスペクター協会(女性公衆衛生行政官の組合のようなもの)が一八九六年に結成されますが、一九一五年には、インスペクターの後に、ヘルス・ヴィジターが追加され、二〇世紀後半の一九六二年になると、この組織の名称は女性ヘルス・ヴィジター協会へと変わります。サニタリー・インスペクターという名前は消えてしまったのです。なぜでしょうか。

一八九九年、バーミンガム市で公務職としてヘルス・ヴィジターが採用されます。公衆衛生公務職にそれまでのサニタリー・インスペクターとは違う職名が登場したというわけです。ロンドンでも「ヘルス・ヴィジター」を雇ってもかまわない」という命令が出ていますし、

表8

バーミンガムのヘルス・ヴィジティング業務	
(1)	MOH が指示した地域での家庭訪問
(2)	消毒剤の配布
(3)	悪臭、新鮮な空気の欠如、あらゆる種類の汚れから生じる害悪への注意の喚起
(4)	母親に対して、子供の食事と衣服に関する助言をし、子供を規則正しく通学させるよう奨励すること
(5)	(訪問宅に)病人がいた場合、助言と援助によって病人をなくさせる手助けをすること
(6)	清潔、節約、節酒の重要性の奨励
(7)	以下の点の留意(調査)、報告
	1. 住居の全般的衛生状況
	2. 全般的な生活方法
	3. 乳幼児の授乳法と衣服状態
	4. 疾病が見られる時、
	(a) 疾病の質
	(伝染性の場合には感染時期と感染経路を調査)
	(b) 医師による診療の有無
	(c) 予防措置の程度

R.E. Gardner, "The Work of a Health Visitor", *Journal of Sanitary Institute*, 21, 1900, 174-5 より作成。

実際に一九〇五年以降、採用が続ききました。

一九〇三年一月号の『イングリッシュウーマンズ・レビュー』誌には、「ウォンズワース市で女性サニタリー・インスペクターを採用した」という記事があります。年俸は一〇〇ポンドです。ところが、「ダンディ市で女性ヘルス・ヴィジターを任用した。年俸は六五ポンドである。ただし、二人ともサニタリー・インスペクターの資格証明書を持っている」という記事が、続けて出ています。これは何を意味

表9

女性衛生監督官の業務	
A群	衛生査察業務
(1)	工場査察(女性に対して公衆衛生法規定の衛生環境の有無)
(2)	ランドリー、女性雇用仕事場、家内労働者対象の工場法・公衆衛生法順守指導
(3)	下宿、寄宿舎等の査察
(4)	貧困地区での住居悉皆査察
(5)	女性用公衆便所の査察
(6)	法定伝染病、非法定伝染病、結核に関する業務および査察
(7)	食品薬品法に基づくサンプル抽出
B群	ヘルス・ヴィジティング業務 (表10)参照
C群	地方における衛生査察官業務
(1)	1902年助産師法規定にもとづく業務(助産師の監督)
(2)	商店営業時間法・店員保護(椅子の提供)法下の商店査察

(Mrs) F.J. Greenwood, 'section IV, Women as Sanitary Inspectors and Health Visitors', in Edith Morley (ed.), *Women Workers in Seven Professions*, 1914, 225-6 より作成。

するのでしょいか。

この後、ヘルス・ヴィジターのほうがどんどん採用されることになりました。任用資格についても、いろいろなことが定められていくようになります。公衆保健衛生においてサニタリー・インスペクターよりもヘルス・ヴィジターのほうが重要だ、というふうな世の中の認識が変わりつつあったわけです。たとえば議会にいろいろな委員会がつかられ、当時のイギリスが抱えている問題について話合う場で「ヘル

表10

衛生監督官のヘルス・ヴィジティング業務一覧

- (1) 乳児のもとを訪問し、母親に授乳やその他一般の育児法について助言を行なうこと(1907年、出生届け出法)
- (2) 妊婦に対して、出産前の母体状況が子供に与える影響についてや自身の健康管理法について助言すること
- (3) ミルク保管所や育児相談所との連携
- (4) 家庭における一般的清潔の奨励、および公衆保健衛生法に基づいて改善されうる衛生上の欠陥の発見
- (5) 一歳未満の乳児の死亡調査
- (6) マザーズ・ミーティングでの講演
- (7) 担当地域におけるヴォランティアの保健活動家の組織化とその活動の調整

(Mrs) F.J. Greenwood, 'section IV, Women as Sanitary Inspectors and Health Visitors', in Edith Morley (ed), *Women Workers in Seven Professions*, 1914, 225-6 より作成。

ス・ヴィジティングが重要だ」と論じられました。ヘルス・ヴィジティングの業務内容は、表8に見られるように、公務職としてのヘルス・ヴィジターを最初に雇ったパーミンガム市においては、婦人衛生協会のマンチェスター支部(LHS)がやっていたような衛生教育、清潔のすすめです。同時に、子どもに関わることに重点を置いたものとなっています。先に述べたように、帝国主義の風潮のなかで、乳幼児死亡率に関心が集まったからです。

一方、サニタリー・インスペクターの仕事は、公衆衛生法に照らして、規定違反の衛生上の欠陥がないかを調べたり、伝染病発生地を調査したりと、いろいろな査察を、大きな権限を持って実施しています(表9参照)。

公衆衛生行政が展開し、この職に女性の登用の可能性が出てくるなかで、そこでの専門職の確立を求めて女性たちは、たとえばデイプロマを取り、インスペクターの資格証明書を取り衛生欠陥の査察に従事していたのですが、時代が変わります。ヘルス・ヴィジティングは、家庭訪問をし、そこで労働者家庭の女性たちに衛生教育を施すという活動でしたが、「そつちのほう的重要だ。母親に直接会って、子育ての仕方、たとえば赤ちゃんへの授乳の仕方などを教えられる」という声が強まったのです。そのため、『七専門職の女性』の記事が明らかにしているように(表10参照)インスペクターの女性がヘルス・ヴィジティング業務もする事例が増えました。

しかし、インスペクターは、権限を持っています。男のインスペクターが傘を持っていたように、高圧的な立場で、強制力を持っている存在ですから、「それでは、家庭を訪問して、必要な情報を伝えるときにうまくいかない。ヴィジターという名前でやるほうがいいんだ」という考えが出てきました。ヘルス・ヴィジターの公務職化の理由として語られました。

これは、公衆衛生の専門職の確立をめざした女性たちの側から見れば、「公衆衛生の女性公務職に二種類のものができて、ダブルスタンダードになるのではないか」ということになります。一方は査察権限

を持ち、法定の正式な職です。そして、その人たちは「ヘルス・ヴィジティングの業務もやれます。やっています」と主張します。一方、ヘルス・ヴィジターは、査察権限がなく、この時点では非法定職です。業務内容は、強制や告発ではなく、あくまでも助言・指導することです。それを根拠に先ほどの一〇〇ポンドと六五ポンドという差が出ます。でも、持っている資格は同じです。サニタリー・インスペクターになろうと思って、学校に行つて、ディプロマを取り、資格証明書を取つたけれども、採用はヘルス・ヴィジターとしてであるという時代でした。

また、男性のインスペクターからは、ここぞとばかりに「女性のサニタリー・インスペクターは要らない。女性はヘルス・ヴィジティングをやつていればいいんだ」というような意見が出てきます。雑誌上で大変な論争が行われました。

結局、サニタリー・インスペクターという女性公務職の位置は、なくなりはありませんが採用は少くなります。代わつて時代は、出生届によつて、新生児に関する情報を正式に地方公共団体(地方の衛生当局)が取得できるようになり、その情報をもとにして、子どもが生まれた家にはすぐにヘルス・ヴィジターが飛んで行つて、生まれた子どもの状況を見て、必要な衛生知識を与え、それ以降の子育てを監督するという方向に進みます。一九一八年の時点で、ヘルス・ヴィジターは一気に増えて、三、〇〇〇名となりました。

このように、ヘルス・ヴィジターとしての女性公務職は定着しました。

ここまでの話のなかに看護師との関わりがまったく出てこなかったことを、不思議に思われるでしょうか。日本では、保助看法が第二次大戦後にできて、保健師・助産師・看護師が一つの法律で統括されています。実際、看護師資格を取つた人が、それに加えて助産師や保健師の資格を取つたりしています。しかし、イギリスの場合、ここまではまったく別個に、看護師はナイチンゲール以来の近代看護の道を進み、一方は公衆衛生の分野での発展の道を来たのです。ヘルス・ヴィジターにしても、サニタリー・インスペクターにしても、かなり早い時点から女性たちが自分たちの専門職としてこれを確立させたいと思ひ、高等教育機関で衛生学のカリキュラムを設け、そこがディプロマを出し、試験を経て資格証明を出すという方法で専門職としての地位を確立しようと努めていました。ですから、途中までは、たとえば教育院(日本でいえば文科省にあたる)が教育課程のシラバスを規定しています。

ただし、二〇世紀に入るあたりから、看護師登録者は六カ月の養成課程を経ればヘルス・ヴィジターになることができるようになります。大学の女子学寮内で二年間の課程を経て、RSI(資格認定団体)の試験を受けて証明書を取つてという、大学教育を通しての公衆衛生公務職という道とは別のルートが出てきたのです。

そして、時代が進み、最終的に第二次世界大戦後、イギリスには国民健康保険制度が発足し、この時点で明らかにヘルス・ヴィジターは看護師職となります。一九世紀半ば以降、培われていたアマチュアヴォランティアの女性の活動や、専門職をめざすフェミニズムの流れ

をくむ運動は、完全なかたちでは実を結ばなかったと言えるかもしれません。

ヘルス・ヴィジターはたしかに職として確立をします。アマチュアヴォランティア活動が公職化したと言えるでしょう。しかし、サニタリー・インスペクターに比べれば低位職です。そして、ある意味、女性の職に特化しています。また、前世紀転換期においてはまだ専門職化はならず、看護師職と一体化することでようやく専門職化できることとなります。「アマチュア・ヴォランティアからプロフェッションへ」というタイトルを最初につけていたと思いますが、前世紀転換期にそれが成功したのかどうか、判断が難しいと言わざるをえません。

また、「社会進出」を「認められていなかった分野に進出すること」と考えるとして話を始めたわけですが、この点はどうでしょうか。公衆衛生公務職に女性は進出はしたが、男性と同一分野への進出は、十分には進まなかったと言え、これも難しいです。ただし、「社会進出」・「専門職化」については、なんとも微妙な判断となりましたが、ヘルス・ヴィジターがこれ以降、非常に大きな役割を果たしていきまます。そこに注目することも、女性史研究において重要だろうと考えています。最後は駆け足になりましたが、これで私の話を終わらせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。(拍手)

参考文献一覧(本文図表に掲示したもの以外)

- ・ Pakes, B.R., 'The Details of Woman's Work in Sanitary Reform', *The English Woman's Journal*, vol.III, no.16, 1859, 217-219.
- ・ Powers, S.R., 'The Diffusion of Sanitary Knowledge', *Trans. of National*

Association for the Promotion of Social Science, 1860, 713.

- ・ Redford, J., 'The Ladies' Health Society in Union with The Manchester and Salford Sanitary Association', *Journal of State Medicine*, 8, 1900, 55-56.
- ・ Gardiner, R.F., 'The Work of a Health Visitor', *Journal of Sanitary Institute*, 21, 1900, 174-175.
- ・ Cameron, J.S., 'Women as Sanitary Inspectors', *Journal of State Medicine*, 10, 1902, 743-50.
- ・ 'Elections and Appointments', *The Englishwoman's Review*, Jan. 15th, 1903, 30-31.
- ・ 'Notes and Incidents', *The Englishwoman's Review*, Jan. 15th, 1903, 42-44.
- ・ Dick, A.M., 'The Work of Women as Sanitary Inspectors', *Journal of Royal Sanitary Institute*, 25, 1904, 879-884.
- ・ Bostock, H., 'The Health Visitor: From the County Council Point of View', *Journal of Royal Sanitary Institute*, 27, 1907, 365-74.
- ・ Richards, H.M., 'The Aim and Scope of Women's Work in Relation to Public Health', *Journal of Royal Sanitary Institute*, 28, 1907, 193-201.
- ・ Nightingale, F., 'Reproduction of a Printed Report Originally Submitted to the Bucks County Council in the Year 1892 Containing Letters from Miss Florence Nightingale on Health Visiting in Rural Districts', 1911, introduced in L. Williamson (ed) *Florence Nightingale and the Birth of Professional Nursing*, v.5, Bristol, 1999.
- ・ 松浦京子「一九世紀後半のイギリスにおける衛生訪問教育―衛生思想に見る「家庭管理のあるべき姿」―」『西洋史学』一七〇号、一九九三年、一八一―三五頁。
- ・ 松浦京子「世紀転換期イギリスにおけるヘルス・ヴィジティングの転換と保険医官」『京都橘女子大学研究紀要』二二号、一九九五年、一五五―一七四頁。
- ・ Davies, C., 'Making History: The Early Days of the HVA', *Health Visitor*, 60(May) 1987, 145-148.

- Abbott, P. & Wallace, C., 'Health Visiting, Social Work, Nursing and Midwifery: A History', P. Abbott & L. Meerabeau (eds), *Sociology of the Caring Professions*, 1998, 20-53.
- Brimblecomb, P., 'Historical Perspective on Health : The Emergence of the Sanitary Inspector in Victorian Britain', *The Journal of The Royal Society for the Promotion of Health*, 2003, 123(2), 124-131.